

# 文学にみる 病と老い

Serialization **93**

文=長井苑子・注記=泉 孝英

鈴木則子

## 「江戸の流行り病 麻疹騒動はなぜ起こったのか」

吉川弘文館 2012 年刊。

疱瘡<sup>\*1</sup> は見目定め、麻疹<sup>\*2</sup> は命定め——江戸時代、麻疹は大人も発病し命に関わると恐れられていた。将軍<sup>\*3</sup> から町人<sup>\*4</sup> まで人々はいかに麻疹と付き合ってきたのか。医学書や御触書<sup>\*5</sup>、浮世絵<sup>\*6</sup> などから論じ、麻疹を通して江戸の社会を描く。

(本書カバー裏表紙より引用)

病気予防、診断、治療をめぐることは、正鵠(せいこく)<sup>\*7</sup>を射たものから、利得を求めての怪しげなものまで登場するのは、いつの時代も同じことである。啓蒙書も、啓蒙というより扇動書としか言いようのないものまで現れる。医師として例外ではない。科学的にきちんと実証されていない異説に腐心<sup>\*8</sup>することもみられる。マスコミも、病気の正しい知識や対応の仕方とはかけはなれた情報を流すことも多い。医師とマスコミが結託すると、効定まらぬ高価な薬は“夢”の新薬と化す。

江戸時代には麻疹、明治・大正・昭和の戦前期には結核、そして、今ではがんが、ヒトに死の不安をもたらし、迷走させる代表的な病気である。「江戸の流行り病—麻疹騒動はなぜ起こったのか」と題した本書には、江戸時代、麻疹が騒動化されていく過程が詳しく述べられている。現代の「がん医療／騒動」の実態を考える上で参考ともなる事柄が結構記述されている。紹介させていただくこととする。

### 「疱瘡は見目定め、麻疹は命定め」

この諺(ことわざ)は、江戸時代(1603~1868)には広く知られていたようである。

『疱瘡、すなわち天然痘は、膿疱

性発疹の跡があばたとなって残ることがあるために「見目定め」と言われたのは、よく理解できる。だが、麻疹が「命定め」とされるのはなぜか』、医師香月牛山(1656~1740)は、『麻疹は一般的には疱瘡よりも軽い病気ではあるが、治療法が少なく、また治療を誤ると病状が急変して命に関わることもあるからだ、と説明する。つまり、麻疹をあなどるな、という警告だというわけだ』。

麻疹の現代的理解を記載しておきたい。

- ①感染力の強い麻疹ウイルスによる小児期に多い感染症。潜伏期は約11日。
- ②患者の多くは小児期に感染し、終生免疫を獲得する。流行が少なく自然感染の機会がなく、また、ワクチン接種を受けていないと、青壮年期に感染・発病することがある。
- ③発熱、せき、目の充血・目やに、全身の発疹が出現する。
- ④発病7日目が見目がピークで、以後は急速に回復に向かう。
- ⑤発熱すると体力を消耗するので、肺炎、脳炎の合併を来すことがある。8日目を過ぎても解熱傾向のみられない場合、解熱後、再発熱した場合は、合併症が疑われる。
- ⑥治療後数年経過して、まれにワク